

考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡（19）

－通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介－

古墳時代研究プロジェクトチーム

例 言

- ・通称「赤星ノート」の神奈川県教育委員会所蔵分の古墳時代に関する項目を抜粋し、報告・掲載していくものである。
- ・研究紀要第26号には横浜市域の1268-1（継続掲載）を掲載した。本資料は横浜市保土ヶ谷区瀬戸ヶ谷古墳の調査時のノートで数年に渡って掲載し、前回は1268-2、1268-3の内容紹介と、1268-1との照合、検討を行った。今回は本古墳の調査について記載された他の資料との関係を検討する。
- ・番号は神奈川県立埋蔵文化財センター年報14～19に記載されている番号に対応している。
- ・執筆分担は植山英史が行った。
- ・各記述は「1. 赤星ノートの内容」「2. 記載資料の整理」の2つに大きく分け、1.の細目は〔調査（踏査）年月〕〔資料保管場所〕〔記載内容概略〕とし、2.は〔（遺跡及び）遺物（遺構）概要〕〔掲載図書〕〔掲載図書概略〕〔小結〕などとし、資料に応じ該当部分を記載した。
- ・挿図や図版は基本的に作図者のタッチを重視し、赤星氏の図、もしくは実測者の図をそのまま掲載し、写真に関しても同様である。
- ・「赤星ノート」は遺構図では略測図に寸法の数字が記載されるものが多く、遺物図は基本的に原寸に近い図ではあるが、なかにはそれから外れるものも存在するため、縮尺は任意掲載のものが多い。



第1図 対象遺跡位置図

年報番号横浜市 01268-1、-2、-3 瀬戸ヶ谷古墳（12） 横浜市保土ヶ谷区瀬戸ヶ谷

1. 赤星ノートの内容

〔調査（踏査）年月〕 1943・1950年

〔資料保管場所〕 東京国立博物館

〔瀬戸ヶ谷古墳と赤星ノート12〕

2. 記載内容の整理

①前回までの紹介資料と比較・検討について

前回は資料1268-2、3にある発掘調査写真6枚について紹介、検討した。台紙に「前方部東側面の円筒列（横須賀考古学会発掘）」と書かれた円筒埴輪列の写真は、資料1268-1にあり、筆者が「埴輪出土位置図」（第2図・再掲）として紹介した図の中で、前方部東側に「昭和25.1.22 横須賀考古学会○発掘16個（？）円筒列」と書かれた個所の写真である可能性が考えられた。また、形象埴輪の出土位置については従前から紹介してきた方眼ノート（資料1268-1）の個別の出土状況図と一致を見る部分も多い。このことから、盾形埴輪、朝顔形埴輪などが撮影された写真5枚が昭和18年調査時のもので、円筒埴輪列が撮影された写真1枚が昭和25年調査時のものと推定した。「埴輪出土位置図」として紹介した図は、昭和18年調査時の成果と昭和25年調査時の成果を合わせたものと推定した。『神奈川県史資料編20』に掲載されている赤星氏が作成した「瀬戸ヶ谷古墳実測図」は、赤星ノートの埴輪出土位置図よりも埴輪のドットが少ない。方眼ノートに出土位置や出土状況などの詳細な記録があるものとドットの位置には相関性があり、詳細な記録があるものを中心にドット図を作成したと推定される。ただし、後円部北西端の埴輪列など方眼ノート詳細な記録がない個所にもドットが記載されており、方眼ノート以外の資料も用いていると推定される。このように資料の紹介を進めて行く中で、昭和18年の調査成果と昭和25年の調査成果の分離や『神奈川県史資料編20』の「瀬戸ヶ谷古墳実測図」を作成する際の方向性などが見えてきたが、今回は他の公になっている報告・資料との比較を行うこととする。

瀬戸ヶ谷古墳の昭和25年の調査報告は『日本考古学協会年報3』に掲載されている。同年報では三木文雄氏と石野瑛氏が個別に報告を作成している。この報告と赤星ノート及び赤星氏が作成した『神奈川県史資料編20』の記述内容との関係を整理し、埴輪配列について検討を試みたい。

②昭和25年の調査報告と赤星ノート

前述のとおり『日本考古学協会年報3』には2つの調査報告が掲載されている。1つは当時東京国立博物館員であった三木文雄氏の「神奈川県横浜市瀬戸ヶ谷古墳（1）」で、もう1つは当時神奈川県史跡調査委員であった石野瑛氏の「神奈川県横浜市瀬戸ヶ谷古墳（2）」である。2つの報告が掲載されていることになった経緯について、編者の注として「多少記載の趣を異にしているので併載することとしたい」とされている。石野氏の報告では、調査報告は三木氏等にゆずり大要と由縁についての考察を記すとしているので、元々石野氏の報告は三木氏が報告することを前提としていたことが判る。以下、それぞれの報告と赤星ノートの内容を見ていく。

三木氏の報告では調査期間は（昭和25年）1月11日から25日までとなっている。調査者は国立博物館の三木氏、八幡一郎氏、増田清一氏、村井嵩雄氏、神奈川県から赤星氏、他に県下の高校生と地主の軽部三郎氏の後援を得たとされる。昭和18年の調査については「埴輪家・埴輪男子像・埴輪帽子・埴輪楯及び埴輪太刀などの形象埴輪」が出土したこと、出土位置について「後円部の頂上と右側のくびれ部から前方部につ

づく斜面からの発見とされている」と記されている。これらの内容は紹介してきた赤星ノートの内容と合致し、赤星氏や瀬戸ヶ谷古墳の地主で横浜市民博物館評議員であった軽部三郎氏（百瀬2008）、帝室博物館から調査に参加した神林淳雄氏等に情報提供を受けたものであろう。

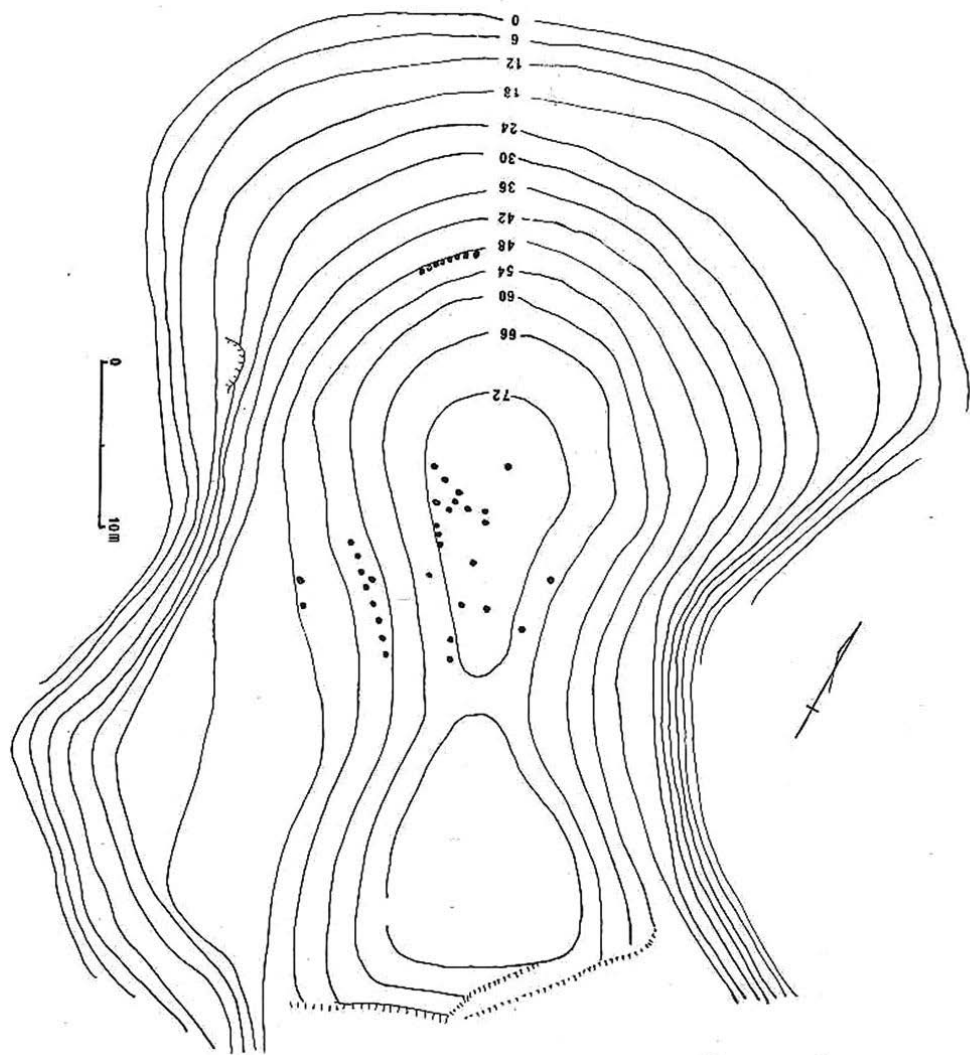
昭和25年の調査では「後円部を取りかこむがごとくに、一定の規格のもとに、埴輪家の破片や埴輪太刀、楯および鞍などの機材埴輪」が出土したとされ、また「後円部から前方部端にいたるまで、2列に1～1.50mの幅で、埴輪円筒列が各個1m前後の間隔で配列されていた」ことを確認している。円筒列の中には機材埴輪の破片も混ざっており、その中で「きぬがさ」2個が注意すべきものとして挙げられている。先だって埴輪が発見されていたくびれ部右側傾斜面でも、「あらたに完全な女子像頭部1個や、埴輪馬脚部等を発見」と記されている。更に「前方部左側や後円部全域」では「後円部頂下3.50m線」に「前方部」では後円部頂下「2m線」に「埴輪円筒が10～20cmの間隔をおいて、整然と配列され」ていることを確認している。後円部全域・前方部左側と前方部で円筒埴輪列の標高が違う点について、瀬戸ヶ谷古墳が丘陵上に営まれているので、「その基底線を決定づける重要なよりどころとなっている」としている。また、「右側裾部の埴輪円筒列は耕作のため破壊され、原状をまったくとどめていない」とされている。

『紀要』25でも紹介したが、赤星ノートの埴輪出土位置図では、後円部中央付近に「後円部家」「家」「家」「楯」、後円部西側前方部寄りに「楯」「剣」「楯」「剣」「この辺は形象」の文字が書かれており、一定の規格のもとに配置されていた様相が明らかにされている。また、墳頂端付近および傾斜面の後円部全体からくびれ部と前方部西側の一部に埴輪列を示す○が描かれており、これが三木氏の報告にある「2列に1～1.50mの幅で」「1m前後の間隔で配列されていた」円筒埴輪列に当たると考えられる。同図には前方部前面を除いた墳端部にも埴輪列が描かれており、これが「10～20cmの間隔をおいて、整然と配列され」た円筒埴輪列であると考えられる。赤星氏の図では、後円部の描かれている上の余白に「間隔30cm」の記載がある。円筒埴輪は下端の径より上端の径が大きくなり、残存する埴輪の上端部間と基底部間では距離が異なるため間隔の記載に差が生じた可能性も考えられるが、三木氏の報告とやや異なる点である。『神奈川県史資料編20』の「瀬戸ヶ谷古墳実測図」(第3図)では、赤星ノートの図で「間隔30cm」と書かれたほぼ同一部分にドットが7点書かれている。前述したように、同部分の詳細な記録は赤星氏の方眼ノート及び今まで紹介してきた資料の中にはないが、墳端の円筒埴輪列の中でこの部分だけドットを描いたのは、他に詳細な記録があった可能性があり、「間隔30cm」は埴輪列間のどの部位間の距離であったかは不明であるが、精度の高い記録であったと思われる。

三木氏の報告で現状をまったくとどめていないとされている右側裾部については、赤星氏の埴輪出土位置図では○の数が少なくなり、「円筒あり」と記載されている。以前にも指摘したが、略図においても赤星氏は状況に応じた表現を用い、○の数を減らしていると考えられる。また、「円筒あり」の記載は現状をとどめていないものの破片が出土していることを示した可能性がある。赤星氏の図では、前方部前面には埴輪列を表す○は描かれていない。三木氏の報告でも、前方部前面の埴輪の記載はなく、昭和25年時の調査では前方部前面の埴輪列は確認されなかったと考えられる。

主体部については「後円部の中央で」発見されなかったが、後円部南端で砥石1点が出土しており「あるいはこの主体部が発掘され、遺物のすべてを持去ったのだとしても良いだろう」としている。『神奈川県史資料編20』では「主体部盗掘。盗掘の後に家形埴輪断欠がなげこまれていた」と記載されている。赤星ノートの家形埴輪の記録について『紀要25』で散乱した状態の出土状況図を掲載したが、盗掘坑のものである可

可能性があるが、同位置を描いた別図の下に「…表土より-110cm箱形●●あり」の記載があり、家形埴輪の基部が残存していた可能性を指摘した。また、今まで紹介してきたその他の赤星ノートの資料でも、盗掘坑の状況が判るものではなく後円部の埴輪配列との位置関係は明確でない。なお、三木氏の報告では古墳の規模を後円部幅40m、前方部40m、惣長80mとしているが、これは尾根下端の平坦面からの計測値と思われる。



第3図 瀬戸ヶ谷古墳実測図

次に石野氏の報告では、石野氏が県史跡調査員として発掘許可申請書を提出し、調査にはオブザーバーの立場で加わったことが記されている。調査期間は1月15日から2月3日とされているが、これは文中で1月15日に神奈川県知事による鉤初式が行われ、2月3日に鎮魂祭が行われたことに触れており、この期間を調査期間としたと考えられる。古墳の規模については主軸40m、前方部・後円部とも20m、高さ4mとしている。赤星氏が作成した『神奈川県史資料編20』の全長41mとはほぼ一致し、墳端の埴輪列からの計測値であろう。なお、『神奈川県史資料編20』の瀬戸ヶ谷古墳実測図では等高線に6単位で数字が書かれているが、最下端を0としており、海拔標高を示したものではない。後円部北西の墳端部に書かれた埴輪列ドットから後円部頂まで4本の等高線があり、高さ4mと合致することから等高線は1m間隔であると思われる。

出土埴輪については「西側埴輪土偶の頭部、埴輪馬の脚・同鈴」、「後円部の中央に近いところから、きぬがさ・さしば・楯・鞆・鞆・太刀など」が出土したと記されている。また、「このたびは前方部の中程から埴輪家の破片が出土した」との記述があり、「古墳のもっとも注目すべきことはこの前方部と後円部の2つの埴輪家をつらね、古墳の頂きに幅2、3mをへだてて左右17、18の埴輪円筒が列んで、羨道のような有様を呈

していること」としている。赤星氏の図には前方部に「家」の記載はなく、出土した家形埴輪片は後円部のように他の形象埴輪とともに一定の区画に配置された状態で発見されたものではなかったと推定される。

③瀬戸ヶ谷古墳の埴輪配列

最後に赤星ノート、『神奈川県史資料編20』、そして昭和25年の三木氏、石野氏の調査報告から瀬戸ヶ谷古墳の埴輪配列について整理することとするが、その前に前方部前面の形状について検討したい。『神奈川県史資料編20』の瀬戸ヶ谷古墳実測図では、前方部前面は切り立っている。南東側は前方部前面端に対して斜めのラインになり、埴輪列も確認されていない。『紀要14』で紹介した赤星氏が昭和18年に作成した古墳の測量図（大要図）には、前方部埴輪中央から前方部頂部南東側に向けてクランク状の道と思われる表現があり、何らかの人為的な手が入っていたと思われる。南東側だけでなく、前方部前面全体が削平されたていたとすれば、古墳の規模はやや大きくなると推定される。しかし、各氏の報告・記録には前方部前面の詳細に触れたものはなく、ここでは可能性の指摘に留めておく。

円筒埴輪列は古墳基底部と傾斜面、墳頂に3重に巡り、古墳基底部の円筒埴輪列は前方部前面と西側の一部を除き全周している。前方部西側の埴輪列は開塋のため破壊されたが、一帯で円筒埴輪片が出土していたと推定される。また、円筒埴輪間の間隔は、赤星ノートで後円部北西「間隔30cm」、前方部側面南東側「間隔50cm」とされている。傾斜面の円筒埴輪列は、墳頂の円筒埴輪列から1.0～1.5mの距離に立てられ、その間隔は三木氏の報告で「1m前後」とされている。墳頂部の様相は三木氏の報告では傾斜面の埴輪列と一括して報告されており、赤星氏の図では東側くびれ部付近が「間隔50cm」とされる。

後円部墳頂では家、楯、太刀、靫、蓋、翳などの形象埴輪が出土しており、家形埴輪は盗掘坑から出土している。家形埴輪は『紀要25』で紹介したように、赤星ノートの出土状況図からも複数個体出土したと考えられる。盗掘坑と埴輪配列との位置関係は不明だが、「後円部を囲むように一定の規格で配置」され、後円部西側からくびれ部にかけては、楯、太刀などの形象埴輪が配置されている。後円部西側からくびれ部にかけては傾斜面の埴輪列と基底部の埴輪列の間にも馬、人物、楯、翳などが置かれ、西側を意識した配置であったことが判る。前方部頂部では家形埴輪の破片が出土しているが、赤星氏の出土位置図では埴輪列の記載も途絶えており、配置位置が判るような出土状況ではなかったと推定される。

以上が瀬戸ヶ谷古墳の埴輪列の概要である。赤星ノートの存在によって、埴輪配列の状況についてかなりの部分が明らかになった昭和18年と昭和25年の調査内容についてもより明確となり、『神奈川県史資料編20』の古墳実測図にある埴輪ドットの内容についても一定程度解明された。改めて、赤星氏の詳細な記録は瀬戸ヶ谷古墳を考える上では欠かせない貴重な資料であると言える。

〔掲載図書〕

『神奈川県史』資料編20 考古資料 1979

引用・参考文献

- 石野瑛 1950「瀬戸ヶ谷古墳（2）」『日本考古学協会年報』3
植山英史「考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡 瀬戸ヶ谷古墳1～10」『研究紀要 神奈川の考古学』12～18・23～26
東京国立博物館 1986『東京国立博物館図録 考古遺物編』（関東Ⅲ）
三木文雄 1950「瀬戸ヶ谷古墳（1）」『日本考古学協会年報』3
百瀬敏夫 2008「写真でみる昭和の横浜（2）：瀬戸ヶ谷古墳の“発見”」『市史通信』3
横浜市歴史博物館 2001「瀬戸ヶ谷古墳」『横浜の古墳と副葬品』